鳥取県智頭町における地域振興活動から、村おこしや国際協力の在り方を考える

森 拓真、川島 達也、田辺 純也、佐藤 翼、阪谷 慧、岡 和宏
山田 博貴、大江 あづき、加藤 知世、浦谷 倫佳、松岡 祐香
上田 早紀、熊谷 志織、狭山 夏彩、濱口 佳奈、磯崎 楓花
近藤 美佑紀、李 美玲、東 佐知、和田 彩伽

はじめに

貧困を解決する為の方法の一つに、その地域に住む人々が主体性を持ち、自分達の住んでいる地域で、どのようにすれば生活を少しでも豊かにすることができるのか考え、試行錯誤しつつ取り組む方法がある。この方法を実践する上で、大変参考になるのが鳥取県智頭町での取り組みである。その為、日本の内外における町づくりにも何か有用な教訓を見出せるのではないかと考え、今回の調査を行った。

智頭町は鳥取県の南東に位置し、岡山県に接する県境地である。町の周囲は 1,000 メートル級の中国山脈の山々が連なっている。町面積の約 93% を山林が占めており、かつては日本有数の「杉のまち」として発展していた。また、古くは山陰と山陽を結ぶ宿場町としても栄えた。しかし、近年の木材価格の低迷等が原因で林業は衰退した。それに伴い、1960 年には 14,390 人いた人口も現在では約半分の 8,000 人ほどまでに激減し、過疎化は智頭町にとって深刻な問題となっている。

これらの問題を解決するために、智頭町は様々な町おこしへの取り組みを行っている。町の豊かな自然は森林セラピーや間伐体験等新たな観光資源として活用されている。さらに、百人委員会や良菜会等住民参加型の町おこしも智頭町独自の取り組みとして行われている。

1．合宿 1 日目

最初に智頭町役場に訪問し、企画課の米本さんのお話を伺った。智頭町における住民主体の地域振興活動がどのようになされているか、また智頭町独自に行っている疎開保険等について伺うことができた。

百人委員会について

百人委員会とは、自立度を高め活力のある地域づくりを進めていくために、町政へ住民の声を反映させていくために設置された組織である。具体的には、住民が身近で関心の高い課題を話し合い、それを解決するための政策を行政（町長）に提案していくことである。図 1 に示されている 5 つの部会から成り、各部会で住民が議論し政策を提案していく。この智頭町百人委員会において最も特徴的なことは予算案、企画書を住民が自分達で作成することである。これらの文書をもとに町長達と予算交渉を実施する。この交渉では当然町長と部会が意見をぶつけ合う。その時に実際に意見の食い違いや不満などがあるという。しかしこのように行政と住民が向き合い議論することにより「森のようちえん」等百人委員会の提案が政策として取り入れられている。また百人委員会は住民が要求・要望するのではなく協力・提案する組織であるため提案に責任が伴う。

部会名	構成人数	事務局
商工・観光協会	12 人	企画課
生活環境部会	10 人	税務住民課
福祉部会	6 人	福祉課
農林業部会	15 人	建設農林課
教育・文化部会	21 人	教育課

図 1　百人委員会の構成（参考　智頭町 HP）

日本 1/0 むらおこし運動

この運動は智頭町が 1997 年に制度化した、従来の智頭町の村社会の変革を目的とした運動であり、無（0）から有（1）へ一歩を踏み出そうという意味が込められている。以前は閉鎖的で保守的であったため町の外との交流が少なかったことを改め、更に戸主ばかりが町の自治に関わっていた状態を改善しようと一人ひとりの意見を尊重しようという考えを大切にしている。町の外の働きかけに頼るのではなく、自分達で起こすボトムアップの運動である。

町長である寺谷誠一郎氏の「小さな町が大都市に勝てる何かの武器はないか」という考えは奥が深い。実際、智頭町独自の特性を活かした活動により、町への訪問者が増加し、引きこもりがちだった町民の意識変革にもつながっていったことに感銘を受けた。この運動には、89 ある集落のうちの 16 の集落が現在参加しており、その数は増加傾向にあるという。今後は外国の都市と交流する予定さえあるという。

図 2　1/0 運動のイメージ図（参考　智頭町 HP）

疎開保険について

智頭町には疎開保険という制度がある。都会で地震等の災害が発生した場合、智頭町へ「疎開」すると 1 泊 3 食 7 日間生活できる場所と食事の提供、加入者特典として智頭町の農産物が自宅に届けられる仕組みで、加入条件は「日本に在住する方」のみと比較的加入しやすく、先着 1,000 名を受け入れる体制となっている。

これは智頭町が独自に企画した、日本全国の自治体で初めての試みで、地域間交流による地域おこしを目的としている。具体的には、(1) ほっとできる癒しの町として、ストレスの多い都会の人々に田舎の良さに気づいてもらうこと、(2) 今まで市場に出なかった高齢者の作る農産物を都会の消費者に送り、地域間交流を発展させることを期待している。

疎開保険は、個人が自治体に寄付を行い住民税と所得税から一定の控除が受けられる「ふるさと納税」とは異なり、保険金に対しモノや生活場所を提供されるのが一番の魅力である。しかし、米村さんによれば、現在加入しているのは約 280 名でまだ避難してきた人はいないという。これからどのようにして智頭町の魅力を伝えていくかが課題である。

良菜会について

米本さんからお話を伺った後、「良菜会」というグループを訪れ、林業とは異なる新たな収益源となりうる農業についての取材を行った。良菜会は、2010 年 7 月に発足し、野菜作りに励んでいる主婦達で構成されている。

智頭町では 2010 年から有機堆肥や低農薬技術の導入を補助する事業を開始したり、農薬等を節減した農作物に交付される「ちづくり～ん」シールを完成させたりと農業を推進している。彼女達は野菜を種類ごとに分担を決めて育て、その野菜を鳥取市内の 4 つの直売所に登録・販売している。販売所での各野菜の売れ行きを知る事によりその土地の顧客のニーズを把握・分析して、来期の活動に繋げている。そんな彼女達を悩ませるものが「野生動物たちの存在」である。猿や鹿等の野生動物は良菜会が育てている野菜に被害を与えたり、四季折々の山菜を食べてしまう。防止策としてネットや柵を設置しているが、完璧ではなく課題は多い。

今後このような問題に対する解決策が見つかり、智頭町の新たなる魅力として減農薬野菜が他の地域にも広まっていく事を願っている。

2. 合宿 2 日目

山形地区振興協議会

山形地区では 2008 年、閉鎖的な智頭町を活性化させ、地域の人達が「山形地区に住んで良かった」と思う町づくりのために、山形地区振興協議会を設立した。協議会は旧山形保育園内に、事務所及び共育センターを置き、地域の一人ひとりをターゲットとして「福祉」と「共育」の二本柱の構想のもとで活動されている。福祉の分野では、事務所と併設さ

れたデイサービスの場があるが、利用者とお世話をする側との区切りがなく、高齢者の憩いの場となっている。また「共育」という面では、大人も子どもに学ぶことはあるとして、全員が先生・生徒の姿勢を持つことを意識されている。このように、立場上での上下関係をつくらない住民間の交流が目指されている。

振興協議会は、これまで全ての世代が参加できる誕生日会を毎月開催したり、県外から来た訪問者と地区の秋祭りや民泊で交流したりする等、地域の中だけでなく外からも活性化を図ってきた。将来に向けての取り組みでは、住民にアンケートをとり、こんな地域になってほしいという希望を基に決められた、福祉・教育・治安等それぞれのテーマにおいて活動を行っている。このように地域の住民にとっては世代を超えて交流できる住みやすいふるさと、地域外の人々からは親しみやすい町づくりを目指している。

間伐体験

午後から私達は現地の方の指導の下、森の中に入り、チェーンソーを使用して間伐体験を行った。間伐とは混み合った森林から曲がったり弱ったりしている木を伐採し、森林の中に彩光を取り入れ、木の育成を促すために必要な作業である。間伐を行わないと、森林は暗くなり、樹木の生長がにぶく、根を張ることが難しくなる。こうなると、土砂崩壊等の山地災害が起きやすい森林となってしまう。

間伐をする際は、間伐を行う木の長さと周囲を確認し、他の木に引っ掛からずにできるだけまっすぐに倒れる場所を探さなければならない。伐採後もその木を資材として利用するために、枝を切り落とし、2 メートルずつに切断し、トラックに積み上げる。切断した木は予想以上に重く、それを運ぶ作業は特に大変であった。この体験から、間伐がいかに大変な労力を伴う作業であるかを実感した。しかし、間伐を含む林業は十分な対価が得られず、それを生業とする人は激減していて、森の整備が隅々まで行き届いていないようだ。安価な木材の輸入などによって、木材価格が下落しているからである。輸入によって、私達はより安く製品を得ることができるが、その一方では、自分達の安全を脅かしているということを知った。

新田村づくり運営委員会

間伐体験の後、宿泊先である人形浄瑠璃の館に移動し、全国初の集落全世帯を構成員とする NPO 新田村づくり運営委員会の活動について、理事である岡田さんからお話を伺った。新田の人口は 1950 年代には 100 人を超えていたが、現在は 50 人程度と半減しており、高齢化率も 60% を超えている。森林に囲まれた集落であり、ほとんどの人が兼業農家という形で生計を立てている。

このような新田集落での特徴的な村おこし活動が、「新田カルチャー講座」の開催と「新田人形浄瑠璃芝居」の公演である。新田カルチャー講座は、様々な分野の有識者を招き、講演してもらうものである。現在は開催されていないが、2000 年から 2010 年まで毎月 1 回欠かさずに開催された。これによって、閉じこもりがちな山村集落の住民が外と触れ合う機会を持てるようになった。また、人形浄瑠璃は幕末から受け継がれてきた伝統文化であり、それによって住民同士の交流と地域の活性化を図ろうとしている。

このような活動によって、拠点施設の建設、ささやかな経済効果、集会の活性化等の結果がもたらされている。しかし、後継者が育たないことや資金不足といった課題も多い。伝統芸能である人形浄瑠璃の遣い手も平均年齢が 70 歳以上であり、後継者の人材確保が急務である。

最後に新田では、若者の都市部への流出が進んでいるが、上記のような村おこしをきっかけに I ターン等で移住する人達もいる。そのために、転入者の住居の確保し、子育てにおいても「深呼吸のできるクリーンな新田」をモットーとして全ての世代が快く生活できるような村づくりを目指している。

3. 合宿３日目

森林セラピー

森林セラピーとは、医学的な計測や評価する技法の進歩によって医学的に裏付けされた森林浴効果をいい、森林浴を一歩進めたものである。具体的には森の中に身を置き、森を楽しみながら、森の中で歩行や運動、リラクゼーション、ライフスタイル指導

等を実施することで森林を利用して心身の健康維持・増進、疾病の予防を目的とするセラピーである。

智頭町では、森林セラピーを町づくりの主要なテーマの一つと位置づけ、森林セラピー協議会の設立やガイドの養成、実験実証等を行い、2010 年 4 月に鳥取県初の「森林セラピー基地」として認定され、2011 年 7 月にオープンした。

森林セラピーは五感を使って自然を感じることを目的としており、実際の体験の中で、目を瞑ったまま視覚以外の感覚を頼りにして歩くことで、小川のせせらぎ、小鳥のさえずりを耳にし、1/f のゆらぎと呼ばれる波長により、安らぎと快適感を味わうことができた。森林セラピーは、林業を主体として町おこしを行っている智頭町における特徴的な観光資源であり、智頭町のキャッチフレーズである「緑の風が吹く町、智頭」ならではの体験だと感じた。

森林セラピーの様子

おわりに

私達の 3 日間の視察で智頭町において地域活性化がうまく機能している要因は 2 つあるという見解に至った。1 つ目は地域資源を利用している点である。林業が衰退してしまった現在の智頭町にとって長い間山間部は価値の無いものとされていた。しかし今ではその山の魅力を最大限活用し森林セラピーや森の幼稚園等の事業を行っている。2 つ目は住民参加型の自治が実際に機能している点である。智頭町では百人委員会等の仕組みがあり、住民の考えが行政に実際に反映されやすい。さらに住民が自分達の地域の為の活動を容易にするための様々な支援制度も整っている。これらの 2 つの要因によって智頭町の人々は意欲的に町おこし活動や政治に参加できるのである。そして智頭町のこの 2 つの要因がうまく噛み合ったからこそ智頭町における町おこしが全国でも有数の地域活性化の成功例となったのである。

地域活性化や途上国開発において重要なことは「その地域に存在しているもので何か価値のあるものを自分達で生み出すこと」である。智頭町の成功の鍵も無価値の地域資源を有価値な地域資源に見方を変え活用した点にある。この考えを利用すれば、住民参加型の地域活性化活動や途上国支援活動が可能になると考えられる。